

資料・研究ノート

ブリタル反日蜂起の史的考察

——インドネシア8月革命序曲——

白石愛子*

The Anti-Japanese Revolt of the Peta Army in Blitar

by

Aiko SHIRAISHI

PETA (Tentara Pembela Tanah Air) was an Indonesian volunteer army organized under Japanese auspices in 1943 during the Japanese Occupation. In February 1945, one of the Battalions of the PETA Army, located at Blitar City, Kediri Residency, in East Java, rose in armed rebellion against Japanese rule. With Soeprijadi Shoodan-cho (Platoon Commander) as leader, several young officers of this Battalion began to plot an anti-Japanese revolt in September 1944. Their hatred and anger against Japan were caused primarily by the cruelty of the Japanese toward the Indonesian population, the pitiful condition of the *Roomusha* (forced laborers) in particular aroused bitter hatred in the hearts of PETA officers who had once worked with those *Roomushas*. The arrogant attitude of the Japanese Instructors appointed to each Battalion also irritated the Indonesian officers. Furthermore they felt that Indonesia should be totally liberated from Japanese rule. Taking all these factors into consideration, we can interpret this revolt as the prelude to the Indonesian Revolution, which began in August 1945.

The Revolt, involving three-fourths of the soldiers of the Battalion, began at dawn on February 14. 4 Japanese civilians and 7 Chinese who were considered to be pro-Japanese, were killed, but the revolt was easily suppressed because of lack of coordination with other Battalions combined with the fact that they had begun the revolt before their plans were complete. 55 of the revolutionaries were tried and sentenced. Six were sentenced to death and executed before the surrender of Japan. The leader of this revolt, Soeprijadi Shoodan-cho disappeared during the rebellion and has not been found to this day. Nonetheless, he was appointed the first Defense Minister and Supreme Commander of the Indonesian National Army, although he never actually assumed these posts. This demonstrates the extent of the influence of the Blitar Rebellion on the development of nationalism and the revolution in Indonesia.

序

1945年8月の日本軍政の崩壊をもって始まるインドネシアの一連の革命運動は、一般に45年独立革命と総称されている。この革命の経緯、意義、あるいは性格等に関する分析はこれまで

* 東京大学社会学系大学院（国際関係論コース）

多くの著作の中で行なわれてきた。その多くは45年革命の出発点を8月17日の独立宣言において、それ以後の問題に関する記述を展開している。しかしながら、さらに時代をもう少し逆流させ、8月17日の独立宣言を生み出すに至ったような軍政末期の急進的青年たちの運動に焦点をあてた研究も近年盛んに行なわれつつある。¹⁾ この種の研究は、45年革命の性格分析を行なう上で非常に貴重なものであり、今後さらに深められてゆく必要があるだろう。

本稿はそのような脈らくの中で45年革命の序曲としての日本軍政時代の反日抵抗運動の一つをテーマにとりあげ、それが革命全体をみるうえでどのような意味をもっていたかという問題について若干の考察を試みんとするものである。著者が本稿でとりあげる「ブリタル蜂起」は、1945年2月ジャワ防衛義勇軍の一大団が起こした反日武装蜂起である。「インドネシア独立」を旗印として立ち上がった彼らは、日本人4名、中国人7名、混血女性1名を殺害し、刑務所を解放し、警察、電話局を襲撃したのちブリタル郊外の山中にたてこもるが、巨大な日本軍の軍事力と権力の前についには鎮圧されてしまう。しかしこの蜂起が日本軍に与えた衝撃は大きかった。特に、日本軍自らが訓練し育て、連合軍に対する強力な友軍として期待していた防衛義勇軍の中から発生した蜂起であったが故にそれは大きかった。一方インドネシアの青年たち、特に他の義勇軍将兵に与えた衝撃も大きかった。

本稿においては、まず蜂起に至るまでの客観情勢、特に蜂起の原因となった事情を考察したのちに、事件の経過をのべ、最後に、それがインドネシア民族および日本軍の双方に与えた影響（衝撃）について考察しようとするものである。²⁾

1) この種の研究としては次のようなものがある。

Anderson, Benedict, *Java in the Time of Revolution: Occupation and Resistance 1944-46*. (Ithaca: Cornell University Press, 1972)

Kanahele, George, *Japanese Occupation in Indonesia: Prelude to Independence, chap. 9 Towards Independence* (Ph. D. Thesis to Cornell University, 1967)

Nugroho Notosusanto, *Pemberontakan Tentara PETA Blitar Melawan Djepang: 14 Pebruari 1945* (義勇軍ブリタル大団の反日蜂起: 1945年2月14日), (Jakarta, 1968)

Idris Adrianatakesuma, *Pemberontakan PETA di Blitar* (ブリタルの義勇軍蜂起) (Yogyakarta, 1973)

Oemar Bahasan, *PETA dan Peristiwa Rengasdengklok* (義勇軍とレンガスデングロック事件), (Bandung, 1955)

Sihombing, *Pemuda Indonesia Menentang Fasisme Djepang* (ファシズム日本に対するインドネシア青年の挑戦), (Jakarta, 1962)

白石愛子 「アンカタン・ムダ運動の形成と展開」『アジア研究』第22巻第1号, 昭和50年4月。

2) ブリタル蜂起に関する著作としては、注1で掲げた Nugroho と Idris の研究書の他に、次のような手記がある。

Soehoed Prawiroatmodjo, *Perlawanan Bersendjata terhadap Fasisme Djepang* (ファシズム日本に対する武力抵抗), (Jakarta, 1953)

Soejono Rahardjo, "Kisah Singkat Pemberontakan Peta Blitar (義勇軍ブリタル大団蜂起に関する小論)," *Madjalah PHB*, Tahun IV, No 2/3 Pebruari/Maret, 1959.

I 背 景

1. 防衛義勇軍ブリタル大団

ジャワ防衛義勇軍は、手薄になったジャワの日本軍防衛力を補充する目的で1943年10月に日本軍政下で設立されたインドネシア人軍である。³⁾ 日本軍の指導下で各州に2～5個大団（1個大団約500名）を設置し、1個大団は4個中団に、1個中団は3個小団に、1個小団は4個分団に分けられていた。義勇兵はもちろんのこと、大団長以下の将校もすべてインドネシア人からなる民族軍であった。ジャワでは3期にわたって大団が設立され、終戦時には66個大団約35,000人の兵力を擁していた。

ブリタル大団は、1943年12月25日にクディリ州ブリタル県ブリタル市に設立され、正式名称をクディリ第2大団と称した。ブリタル市は、クディリ州の州都クディリ市から南東へ約84km、またマラン州マラン市から南西へ約80kmの地点にあり、ケルト山麓のブラントス川流域にある農業地帯である。この付近は土壌が悪く、またブラントス川の氾濫がはげしいため、昔から米作はあまり振るわなかった。付近には、コーヒー、茶、砂糖などのプランテーションが多く、ブリタル周辺の住民の多くはこれらの農園労働者であった。

貧しい土地柄、昔から左翼運動が比較的根をもちやすく、また戦後においてはインドネシア共産党（PKI）の勢力が強かった。1965年の9・30事件以後共産党の残党が南ブリタルにたてこもり最後まで抵抗を続けたことでも知られている。



歴史的に見ると928年にマタラム王国（Mataram）の王エンブ・センドック（Empu Sendok）がカフリパン（Kahuripan）を首都に選び、これ以後1222年に至るまでこの地を中心として王国の繁栄を見た。⁴⁾ 民衆のいい伝えによれば、マドゥラの王子トゥルノジョヨがマタラム王国

3) ジャワ防衛義勇軍に関しては、次の拙論を参照されたい。

白石愛子「ジャワ防衛義勇軍の設立」『東南アジア 歴史と文化』第4号、(東南アジア史学会、1974) 1974.

4) A. J. エイクマン、F. W. スターベル著（村上直次郎・原徹郎訳）『蘭領印度史』（東亜研究所、昭和17年）9 pp.

に反乱を起こして敗れた際、近くのケルット山中に逃げてきてこの地に住みついた。またジャワ戦争の時、ディボネゴロ軍の落武者がブリタル周辺の山岳地帯へ逃げこんで、新しい村落^{デサ}を開拓し、住みついたといわれる。⁵⁾

宗教的にみると、トゥルンガグンに始まる東ジャワの南海岸一帯は昔から神秘主義 (mysticism) の盛んなところで、ブリタル周辺でもいわゆる Javanism の影響が強かった。それに加えて仏教・ヒンズー王国時代の遺跡も豊富で、中でもブリタル市の北方15kmにあるチャンディ・プナタラン (Candi Penataran) は有名である。またブリタル市の南ロドヨ村のキドゥル Kidul 山中には多くの寺 (Candi) があり、スンプルジャリ寺 (Candi Sumberdjali) にはモジョ・パヒト国王スリ・マハラジャ・クルタラジャサ (Sri Maharadja Kertaradjasa) の墓がある。⁶⁾

ブリタルでの大団編成に先だって、まずこの地方の名士あるいは青年リーダーの中から義勇軍の幹部候補生が選ばれた。中団長以上は応募というよりも上からの指名による者がほとんどで、大団長にはブリタル郡長のスラフマッド (Soerachmad), 第1中団長にはブリタル村長スフッド・プラウィロアトモジョ (Soehoed Prawiroatmodjo), 第2中団長には師範学校教師のハサンナワウィ (Hasannawawi), 第3中団長にはタマン・シスワ学校長のチプトハルソノ (Tjiptoharsono), 第4中団長にはブリタルの検事スジョトモ (Soedjotmo) が選ばれた。⁷⁾ 小団長は主として中等以上のオランダ教育を受けた小プリアイ階層の子弟を中心に選抜された。

これらの幹部要員は、ジャワの他の地方からの候補生たちとともに、1943年10月末からボゴールに集められ、この地の義勇軍錬成隊において日本軍から60日にわたる訓練を受けた。その後ブリタルへもどって、市の東端近くにあるベンドグリット (Bendogerit) の原住民中堅官吏養成学校 (Middelbare Oplei dingsschool voor Inlandsche Ambtenaren 略して M. O. S. V. I. A.) 跡を兵舎に定めて、一般義勇兵を募集し大団を設立した。⁸⁾

1944年の初めから、さっそく義勇兵の訓練が開始された。訓練には、個人単位のもの、分団単位のもの、および小団単位のものがあったが、そのうち一番中心になったのは、小団ごとの訓練であった。小団戦闘教練は、ブリタル市の東方約15kmにあるカリプティ (Kaliputih) で行なわれた。そこには、田があり、畑があり、谷があり、河があり、村がありで、非常に変化に富んだ地形をなしており、戦闘訓練には好適であった。⁹⁾ 義勇兵たちは、15kmの道のりを歩いて、また、時には“かけあし”で訓練に向かうのであった。

5) マラン在住の歴史家スティ・ラハユ (Suti Rahaju) ならびにプラニョト・スチョアトモジョ (Pranjoto Setjoatmodjo) 姉弟とのインタビュー (1973年2月、マランにて)

6) Soehoed, *op. cit.*, pp. 11-12.

7) 元ブリタル大団の教育中団長スカンダル (Sukandar) とのインタビュー (1974年7月、ジョクジャカルタにて)。彼自身は、義勇軍入隊前はブリタルの原住民小学校 (H. I. S.) 教師であった。

8) 現在ここは、工業中学校の敷地になっているが、正面には大きな兵士像があり、像の下に石碑には、「1945年2月14日、まさしくこの地点からスプリアディ小団長の指導下に反日蜂起がスタートした」と記されている。またその前の通りは、「英雄通り」(Jalan Pahlawan) と命名されている。

9) Soehoed, *op. cit.*, pp. 95-96.

一定期間の基礎的な訓練が終わると、次には各中団ごとに分かれて、自分たちの受け持つべき地域へおもむき、防衛戦とゲリラ戦のための訓練が行なわれた。第1中団はブリタル市の東方にあるクサンベン（Kesamben）で、“対空監視”の任務につくことになった。一方、第2中団は、ブリタル市の南方にあるセラン（Serang）において、“海岸監視”の任務を得た。第3中団と第4中団は、引き続きブリタル市に残留していた。¹⁰⁾

1944年7月以降大団は、陣地構築の命を受けて、南部海岸へ向かった。第1中団は、ジョヨストロ（Joyosutro）地方、第2中団はセラン地方、第3中団はタムバック（Tambak）地方へおもむいて現地に駐屯しつつ、陣地構築の仕事にたずさわった。第4中団のみは、引き続きブリタル市に残りブランタス（Brantas）川のグロンドン（Glondon）橋およびカドマンガン（Kadomangan）橋の防衛に当たった。¹¹⁾

1944年の10月以降は、ガンタン（Ngantang）溪谷での陣地構築の使命を受け、大団戦闘本部はガンタン市へ移動した。第1中団はクリシク（Krisk）において、第2中団はカセンボン（Kasenbon）において、第3、第4中団はガンタン周辺において、それぞれ任務を分担した。また、一部将校の配置転換が行なわれたのもこの時期である。¹²⁾

1945年になると、大団全体が、北部海岸のトゥバン（Tuban）での合同訓練を受けるようにとの命令を受けた。しかしながら、後述するようにこの訓練は、彼らがトゥバンへ到着した後に、突然日本側から中止を通告されたため結局実行されなかった。そしてそこからもどって全大団が再びブリタルに集結した時、反乱が勃発したのである。¹³⁾

2. 困窮するジャワ社会

蜂起の経過を見る前に、当時のジャワの社会的、経済的、政治的状况に関する若干の記述を試みたい。それは、第一に蜂起の原因をさぐる上で、第二に蜂起がジャワ社会に与えた影響を知る上で重要と思われるからである。

1943年末から加速度的に深まっていった日本軍の戦況の悪化は、兵站基地として重要な役割を課せられていたジャワ経済にますます重圧をかけ、民衆の生活を圧迫し、強い社会不安をもたらすようになっていた。あらゆる物資は戦略物資であろうと民需物資であろうと軍の管理下におかれ、農民に対しては厳しい強制供出政策がとられていた。その結果、ジャワ社会における食料、衣料その他の必需物資の流通量は著しく減少し、民衆の経済生活は極端に圧迫されていた。また日本軍はこのような経済搾取のみならず、「労務者」の徴発という形で露骨な労働

10) Nugroho, *op. cit.*, p. 13 ならびに Soehoed, *op. cit.*, p. 97.

11) Soehoed, *op. cit.*, p. 123 ならびに Nugroho, *op. cit.*, p. 13.

12) Soehoed, p. 131 & p. 185.

13) Nugroho, *op. cit.*, p. 14.

力の搾取も行なった。この対象となったのは16才～40才までの男性、および16才から25才までの独身女性で、形式上は応募という形をとっていたが、実際は村長らの手をかりてあらゆる強制によって徴発したのであった。¹⁴⁾

政治的には、結社、集会、言論の自由を奪われ、ジャワ侵攻前に日本軍が約束していた民族歌や民族旗の使用も禁止され、その一方で、大東亜共栄圏思想や新秩序というような日本の価値体系を強要され、民衆は動員力を高めるため各種の翼賛組織の中へ組みこまれていった。憲兵隊による弾圧の厳しさも民衆を恐怖におとしいていた。こうしてジャワ上陸当時の「解放者」としての日本のイメージは、はるかかなたに消え去り残忍な「抑圧者」「支配者」としてのイメージが前面に押し出されてきた。

もちろん、宣伝班を中心とする巧みな宣伝活動や民族意識をある程度満足させるような懐柔政策によって、日本側は絶えず彼らの心をひきつなごうと試みていたが、1944年後期になるとそれももはや限界に達していたのであった。現に1944年の春から夏にかけてジャワの各地で反日抵抗事件が発生していた。たとえば、1944年2月18日には、プリアンガン州タシクマラヤ県で、回教指導者に率いられた農民の反日暴動事件が発生した。その直接の理由は、米の強制供出に対する農民たちの不満にあったといわれる。さらに同じ年、チレボン州のある農村で、日本軍の指示を忠実に実施しようとする県長、郡長に対して、住民が2回にわたって暴動を起こした。このほかに、謀議段階で発覚し、未遂に終わったものとしてモホタル事件がある。これは、当時ジャカルタ医科大学の細菌学の教授であったモホタル博士が、予防接種液に破傷風菌を混入させて日本人殺害を計画したというものである。¹⁵⁾

そのような時、1944年9月の帝国議会における小磯首相の演説の中で、民心把握のための最後の手段として、将来東インドに独立を与えることが発表され、一時的な緩和剤の役割を果たした。インドネシア人の政治参加が拡大され、義勇軍も拡張され、民族旗、民族歌の使用も再び許されるようになった。しかしながら、年があけて1945年になっても、インドネシア独立のための具体的な政策は何一つうち出されず、民衆の不満は再びうっ積してきた。日本軍は依然として強力な権力を維持しており、インドネシア民衆の生活はますます苦しくなり、日々の糧さえも十分得ることができなくなってきた。独立の時期も明示されない上、それに向けての準備も何一つ開始されていなかった。その一方で、時おり様々な秘密ルートで伝えられる戦況は、加速度的に日本軍にとって不利なものになりつつあった。1945年2月14日、ブリタルの義勇軍が立ち上がった時のジャワをとりまく状況は、そのようなものだったのである。

14) 早稲田大学社会科学研究所編『インドネシアにおける日本軍政の研究』（紀伊国屋書店、1959）p. 310 および p. 312.

15) 同上、pp. 203-205.

II 蜂 起

1. 原因と目的

ブリタルの義勇軍を武装蜂起へと立ち上がらせた原因は何だったのであろうか。そしてまた、彼らの運動が目指していたものは何だったのであろうか。のちに大団長スラフマッドが語ったところによれば、蜂起の指導者スプリヤディ Soeprijadi が大団長も計画に参加するよう勧誘した時、蜂起の原因と目的について次のように述べたといわれる。¹⁶⁾

1. 民衆、特に労務者たちの悲歎をこれ以上見るにしのびない。
2. 周囲の日本人の傲慢さと残酷な行為をこれ以上我慢できない。
3. 日本をはじめとする諸外国から何ら干渉を受けない真に自由な独立を求めたい。そのためには贈り物としての独立を待つのではなく武力でかちとらねばならない。小磯首相が約束した“将来の独立”はでたらめで自分は信じていない。

一方、元ブリタル大団教育担当中団長であり、蜂起に参加して15年の刑を受けたスカンダル (Sukandar) は蜂起の原因を次のように述べている。¹⁷⁾

1. 陣地構築作業を通じて知った労務者の悲惨な状況に対する怒り。
2. 日本人指導者の義勇軍に対する侮辱的な態度ならびに“独立の約束”と矛盾するような言動。例えば「お前達は馬鹿だから独立なんかできないのだ」「ギューヘイ（義勇兵）なんかスイギュー（水牛）と同じだ」というような発言。また、一般に義勇軍将校はより下位の日本軍兵士に対しても敬礼することを要求され、将校としての威信をしばしば傷つけられていた。
3. インドネシア女性に対する日本人の性的な搾取に対する怒り。¹⁸⁾
4. 「組合」の名において行なわれる経済的搾取に対する怒り。

インドネシア国軍史研究所編の『インドネシア民族武力闘争小史 (Sedjarah Singkat Perjuangan Bersendjata Bangsa Indonesia)』(Jakarta 1964)ならびにイドゥリスの『ブリタル義勇軍反乱 (Pemberontakan PETA di Britar)』の中に述べられている原因もほぼ同様の内容である。

以上のことから、蜂起の原因は、主として(1)日本の占領政策の苛酷さに対する不満、(2)周囲の日本人、特に指導者の悪態に対する感情的反発、(3)引きのばされている独立の約束に対する不信といったことにあり、またその目指すところは、贈り物としての独立を拒否し実力によっ

16) Nugroho, *op. cit.*, p. 25. なお、大団長とスプリヤディは、伯父と甥の間柄であったといわれる。

17) 同氏とのインタビュー（前述）

18) 例えば、多くの女学生が東京へ留学させるという名目で連れ去られたが、現実にはスラバヤで娼婦にさせられたという。

て独立を奪取すること、もしくは奪取すべきことを示すこと、にあったと考えられる。

ところで、この蜂起の背後には何らかの反日地下運動との政治的なつながりがあったのであろうか。これに関してケーヒン (Kahin) はアミル・シャリフディン (Amir Sjarifuddin) を中心とする反日地下抵抗組織によるオルグ活動があったと述べている。¹⁹⁾ 彼によれば、日本軍政下の主要な四つの反日組織はいずれも義勇軍への浸透工作を行なっていたが、そのうちブリタルを含む東部ジャワで活動していたのがシャリフディンのグループであったという。しかしながらこのことは、その他の研究書においても、あるいはまた関係者の証言によっても他に傍証を得ることができない。またケーヒン自身この情報源を明示しておらず、この説はあまり信憑性がないものと思われる。その他の資料から知り得る限りでは、この蜂起は特に特定の政治色を持った団体との結びつきはなかったものと思われる。

2. 準備会談

反乱が誰によって、いつ、どのように発案され、どのような形で具体化したかは、首謀者とされている人々が皆死亡したり行方不明となってしまった現在、深く知ることはできない。ただ参加者の多くの者の証言をあわせると、一般には第3中団の第1小団長スプリヤディが発案者であったと言われている。またヌグロホは、首謀者としてこのほかにムラディ (Moeradi) 小団長 (当時大団副官)、ハリル (Halir) 分団長 (炊事係分団長) およびスナント (Soenant) 分団長 (第3中団の指揮班長) の三人の名をあげている。スフッドによれば最終的な準備会議に出席したのは、スプリヤディ、ムラディ、スバルヨノの3小団長とスナント分団長であったという。

スプリヤディは、1923年トゥレンガレック (Trenggalik) に、中級官吏の息子として生まれた。祖父はケドゥン・ワル (Kedung Waru) の副郡長、父はポノロゴ (Ponorogo) やケルトソノ (Kertosono) の郡長 (ウェダナ) を務めた伝統的なブリヤイの家系であった。スプリヤディはポノロゴのヨーロッパ人小学校 (E.R.S) ならびに原住民中学校 (Mulo) を卒業したのち、マゲラン (Magelang) の原住民中堅官吏養成学校 (M.O.S.V.I.A) に進んだが、2年生の時日本軍の侵攻となり学校は閉鎖された。当時ケルトソノ (ブリタル市の北) の郡長をしていた父は親蘭派とみなされ、家は日本軍の命令で民衆たちに破壊されてしまったため、一家は財産を失って逃げまどった。やがて平和が確立すると共に一家はケルトソノにもどり、父も再びこの地の郡長としての職を得た。M.O.S.V.I.A を中退したスプリヤディは、やがてスラバヤの工業学校へ進んだが、在学中に抜擢されて日本軍参謀部別班の運営するタンゲラン青年道場へ入隊した。これはインドネシア人特殊要員養成のための機関であったが、ここでの訓練が完了す

19) Kahin, George M., *Nationalism and Revolution in Indonesia* (Ithaca: Cornell University Press, 1952) p. 114.

る頃、義勇軍が設立されたため、スプリヤディは他の仲間たちと共に自動的に義勇軍幹部要員としてボゴール錬成隊へ送られた。訓練終了後小団長に任官し出身地クディリ州のブリタル大団へ配属されたのである。²⁰⁾

スプリヤディは、面長のほっそりした体格で、無口で物静かな性格の青年だった。非常に神秘主義的で、子供の頃から断食や冥想にふけることが多かった。ある時は1時間も太陽を見つめていたり、ある日は果物ばかり食べたりという変わったところもあった。そして感情をあまり表に出さず自制心の強い人でもあった。²¹⁾ 彼の神秘主義的な人格にまつわる次のような話もある。小学校の2年生の時、医師も祈禱師も手に負えないような大病にかかりどんどんやせ衰えていった。高熱が1カ月ほど続いたのち母を呼んで、「明朝僕は病気が治る。夕方5時に青豆のおかゆと青いバナナを用意してほしい」と語った。すると彼の言葉は本当になり翌夕5時までにはすっかり平熱にもどってしまった。それ以後どんどん体力が回復し2カ月後には学校へもどってきた。のちに語ったところによれば、スプリヤディは病気になる前に町の広場(alun-alun)へ行き、ジャム(jamu)というジャワ伝来の薬を売っている男に会い占ってもらったところ「あなたはやがて病気になるがそののちに特別な力(wahyu)を得るだろう」と言われたそうである。²²⁾ このような物静かで隠者のような神秘主義的な雰囲気をつたよわせていたスプリヤディに対して、ムラディ小団長とスパルヨノ小団長は武人(クシャトリア)らしい剛健さとエネルギッシュな性格を持っていた。²³⁾

ヌグロホによれば²⁴⁾、反乱計画のための第1回秘密会談が開かれたのは、反乱の五カ月前、即ち1944年の9月のことであった。会談を主宰したのはムラディ小団長であり、一方反乱の筋書と動機に関する一般的な手引きを与えたのはスプリヤディ小団長であった。この会議に出席していたのは、この2人のほかに4人の小団長と6人の分団長計12人であった。²⁵⁾ 会談が行な

20) スプリヤディ小団長の母ススリ(Susulih)とのインタビュー(1973年2月、ブリタルにて)。

21) スカンダルとのインタビュー(前述)ならびに Soehoed, *op. cit.*, pp. 142-143.

22) スプリヤディの母とのインタビュー(前述)。

23) Soehoed *op. cit.*, pp. 142-143.

24) 以下、反乱の準備過程に関して、特に断りがない限り、Nugroho, *op. cit.*, pp. 20-29 による。

25) その12名の氏名と階級、ならびのちに下された判決は、次のとおりである。

スプリヤディ	(Soeprijadi)	小団長(第3中団)	行方不明
ムラディ	(Moeradi)	小団長(大団副官)	死刑
スハディ	(Soehadhi)	小団長(兵器係)	7年
スマルディ	(Soemardi)	小団長(経理係)	15年
パルトハルジョヨ	(Partohardjono)	小団長(物品係)	15年
スキヤット	(Soekijat)	小団長(第3中団)	離脱
スヨノ・ラハルジョ	(Soejono Rahardjo)	分団長	10年
スナント	(Soenanto)	〃	死刑
ハリル	(Halir)	〃	〃
ソッフアン	(Sofchan)	〃	7年
スカエニ	(Soekaeni)	〃	7年
タルムジ	(Tarmoedji)	〃	7年

われたのは、義勇軍兵舎内のハリル分団長の部屋であり、裏の憲兵隊からわずか 100m しか離れていなかった。スプリヤディは会談のはじめに「ここに出席している者は皆平等で階級の差はない」と述べて全員に階級章をはずすことを求めた。スプリヤディは、市外へ出て労務者たちと共に働いた時、多くの人々が日本の圧迫のもとに非常な苦しみを受けているのを見ていかに怒りに燃えたかを出席者に思い起こさせたのち、日本軍に対して反乱を起こすとすれば賛成するか否かをたずねた。直ちに全員が賛成を表明した。この日の話し合いの結果、最後に次のようなことが決定された。

1. ブリタル市の一般市民の中から協力者を探し求め、彼らと接触を深める。
2. 他の大団にも同時蜂起を働きかける。
3. 反乱の目標および計画について、それぞれの部下たちに説明する。

第2回目の会談が開かれたのは、それから二カ月後の、1944年11月中旬のことであった。場所は同じくハリルの部屋である。前回の会談以後の各自の活動報告が行なわれたが、それを上記の決議に則して要約するとおおよそ次のようであった。

1. 先ずブリタル市民との提携に関してはまだ何ら可能性は見出されていない。
2. いくつかの大団との連絡はすでにとられた。²⁶⁾
3. 同僚や部下たちは大部分が参加する見込みがある。

またマラン(ブリタルの東)ではすでに Anti Indonesia Merdeka (反インドネシア独立 A.I.M) という地下抵抗組織が作られたということが報告された。

第3回目の会談は、1945年1月中旬に、大団全部が、トゥバン(Tuban 北部海岸)へ出発するためにブリタルに再結集した時に開かれた。ここでは、トゥバンで合同訓練を受ける予定の他の10個大団を誘って一勢に蜂起する計画が練られた。その計画によれば、ブリタルに残留している一部の者が、蜂起発生と同時に大団の武器をすべてマディウン(Madiun)へ運ぶことになっていた。トゥバンへは1月19日に出発した。トゥバンへ向かう車中で、スヨノ・ラハルジョ(Soejono Rahardjo)は秘密会談の全参加者に弾薬を分配した。ところが、トゥバンに着くと他の大団はきておらず、突然合同訓練が中止され、1週間後に全員ブリタルへもどるよう命ぜられた。おそらく日本側が、義勇兵たちの何らかの動きを察知して、一カ所に多くの兵力を集結させておくことの危険性を感じたためであったらしい。かくして、一勢蜂起はおろか、他の大団と連絡をつける機会さえ失われてしまったのであった。

2月1日になって、第4回目の秘密会談が行なわれた。この席上スプリヤディは、すでに計画が憲兵隊に知られているからとの理由でその夜すぐに蜂起することを主張した。しかし他の者たちは、長い旅から帰ったばかりで部下たちはまだ疲れているからと言って反対した。

26) スグロホは次の地方の大団の名をあげている。

トゥルンガグン、クディリ、マラン、ルマジャン、マディウン、スラバヤ(以上東部ジャワ)、ジョクジャカルタ(中部ジャワ)、ジャカルタ、タンゲラン、バンドウン(以上西部ジャワ)

その後2月5日に、隣接のトゥルンガグン大団(Tulung Agung—クディリ第1大団)との間で小団長の柔剣術の合同訓練が行なわれることになり、ブリタルの小団長たちはトゥルンガグンへおもむいた。訓練が終わって休憩していた時、両大団の一部の小団長の間で蜂起に関する話し合いが持たれた。その中でブリタルの小団長は、蜂起の計画を述べ、いったん開始したなら直ちにトゥルンガグンへ連絡員を送ることを申し合わせた。²⁷⁾

その後2月9日に、第5回目の会談がもたれた。スプリヤディは、再度蜂起を決行することを促したが、まだ他の大団から共闘の具体的な連絡がきていないとの理由で再び拒否された。なおこの時、義勇兵たちが師と仰いでいたバ・ベンド(Mbak Bendo)という予言者が蜂起にはまだ時期が早いと忠告したことも影響していると考えられる。また、この頃までには、ブリタルの民間の有力者たちとの間にも蜂起に関してかなり連絡がとれていたようである。例えば、ブリタル師範学校の学生リーダー、スマリ(Soemali)らを初めとする青年たちと連絡がとれた。²⁸⁾ また、元ブリタル県長プリアムボド(Prihambodo)、スカルノの義兄で戦前国民党党员であったワルドヨ(Wardojo)、ブリタル市参議会議長アブドゥル・ワシス(Abdul Wasis)、中国人医師タン(Dr. Tan)なども蜂起計画をうちあけられ賛意を表していたが、まだ時期尚早というのが一般的意見であった。タン夫人がドイツ人であったため日本軍の信頼もあつく、それをかくれみのにして、禁止されていた海外放送を聴取していたので義勇軍の将兵たちにも正確な戦況が伝わってきた。それによれば、日本軍は苦戦を重ねており、彼らは「4～5月頃にはジャワにも連合軍の大規模な空襲が開始されるであろうから、その時期をみはからって蜂起するのが最も有効である」と考えていた。²⁹⁾ またこの頃日本軍が反日的パモン・プラジャ(pamong praja)のブラックリストを作り殺害を予定しているという噂があり、パモン・プラジャの間に恐怖をよび起こしていた。³⁰⁾

そのような中で、2月11日午後大団内で次のような事件があった。午後3時頃指導下士官田中伍長が飲酒して刀をふりかざして大団内であれば、「スプリヤディはどこだ。あいつは反乱を起こし日本人を皆殺しにしようと言っている。悪い奴だ。殺してやる。」などとわめきだした。田中伍長は憲兵隊から蜂起計画を知らされていたのであった。居あわせたスカンダル中団長が、サッカー場で訓練中のスプリヤディのもとへかけつけ事件を知らせ、危険だから大団へもどらずどこかへ逃げるようにと助言した。スプリヤディはこれに従い、そのまま姿を消してしまった。この間スプリヤディは、これまでもたびたび彼らに影響を与えてきたバ・ベンドのもと

27) Idris, *op. cit.*, pp. 35–36.

28) *Ibid.* p. 34.

29) *Ibid.* p. 37.

30) *Ibid.* p. 80.

東部ジャワだけで、1942–45年までの間に、県長 10名、郡長 4名、副郡長 8名、その他多数のパモン・プラジャが日本軍によって殺された。その中には、オランダ時代最後のブリタル県長であったプリアムボド(Prihambodo)もいる。

へ助言を乞いに行っていたのであった。³¹⁾

一方大団では、大団長や岩淵少尉らが田中伍長をとりなし、事件は一応解決していた。しかしこの事件後、突然岩淵少尉から、訓練に必要な一部の武器を除いてあとはすべてスラバヤへ送り返し、また各中団を再び市外へ送り出して分散させるという計画が伝えられた。また13日朝、教育中団長 スカンダルは通訳として岩淵指導官に同行して警察へ出頭させられた。その時、参議会議長のアブドゥル・ワシスも警察へ呼ばれていた。彼は、かつてイスマイル中団長から蜂起計画を打ちあけられ援助を求められていたのであるが、警察に追求されて口を割ってしまった。もっとも警察のほうは、それ以前に事実をつかんでおり、アブドゥル・ワシスにはただそれに対する確証を求めただけであったといわれる。³²⁾

スプリヤディは13日夜になって突然大団へ戻って来た。軍服をぬぎ、半袖のうす茶のシャツに濃赤のサロンという姿であった。腰には先祖伝来のクリス(短剣)をさし、左手には軍刀を、右手にはピストルをにぎっていた。彼は仲間たちを集め、その夜のうちに直ちに蜂起を決行することを提案した。「計画がもれてしまった以上間もなく憲兵隊の手がのびてくるであろう。憲兵隊にむざむざ殺されるくらいなら、蜂起を決行したほうが良い。」また、「他の大団との連絡はまだとれていないが、ブリタルが立ちあがれば彼らもあとに続くだろう。」という判断によるものであった。仲間たちも今回はスプリヤディの意見に賛成した。かくして、いよいよ1945年2月14日午前3時、ブリタル大団の反日武力蜂起が点火されたのである。

3. 蜂 起

蜂起は、1945年2月14日午前3時、迫撃砲発射を合図に、その火ぶたを切った。それに先だって、スプリヤディは住民の間でパニック状態が起こるのを避けるために電話局へ行き、ブリタル県長サマディクン(Samadikun)と、ブリタル市長モホタル・プラブ・マンクネゴロ(Mochtar Prabu Mangkunegoro)と警察に電話をかけ、大団はこれから実弾を使っての訓練を行なうので、住民は静かに家の中に留まっているようにと伝えた。この間、スハディ(Soehadhi)およびスヨノ・ラハルジョ分団長が、兵器庫からとりだした武器を各小団に分配した。さらに眠っていた義勇兵たちに非常呼集がかけられ、着衣して整列するよう命じられた。そして、集まった義勇兵たちを前にして、スプリヤディとムラディが反乱計画を説明し、訓示を与えた。参加したくない者はぬけても良いと説明されると、何人かの兵士はその言葉に従った。さらにこの時、二つの重要な命令が与えられた。その一つは、同胞には決して銃を向けてはならないということ、もう一つは、出会った日本人をすべて殺せということであった。

そのように準備が整ってから、迫撃砲の発射によって攻撃が開始されるまで全員はいったん

31) スカンダル中団長とのインタビュー(前述)。

32) 同上

休息を命ぜられ、装備をつけたまま仮眠をとった。兵舎外の自宅で眠っていたパルトハルジョ (Partohardjo) 小団長は、迫撃砲の音を聞いてただちにかけつけ、自宅に保存してあった紅白旗 (民族旗) を大団前の広場に掲揚した。かくして準備は整い、反乱の幕は切って落とされたのであった。³³⁾

迫撃砲の合図に続いて、まず、クスニ (Koesni)、トゥヌス (Toenoes) 両分団長が、大団に隣接した指導官邸と、裏手の憲兵隊を重機関銃で攻撃した。しかし、指導官はたまたま不在、また憲兵隊は事前に危険を察して逃げていたため、双方とも被害はなかった。³⁴⁾

それに続いて、プジ (Poedji)、アミン (Amin) 両分団長に率いられた部隊が市内へくり出し、電話局、日本人経営のホテル、日本人警察官官舎などを襲撃した。電話局では電話線を切断して通信を不可能にした。この間、姿を現わした日本人電話局長を射殺した。

また、警察官官舎ではかねてから彼らのブラック・リストにのっていた日本人警察官片岡を自宅に襲い射殺した。ホテルでは日本人経営者を負傷させた。³⁵⁾

ムラディに率いられた他の一隊は、日本人がしばしば出入りしていた混血女性の家を襲い、そこで日本人2名とその女性を射殺した。ついで親日的な華僑黄了良一家を襲って家人数人を戸外へ連れ出して殺害したり負傷させたのち、さらに路上で出会った華僑男性1名を射殺した。³⁶⁾ しかるのちにブリタル刑務所を襲い、監守に全政治犯を釈放するよう命じた。しかし誤解が生じて刑事犯まで合計258人が釈放されてしまった。この時、中国人の囚人は残されたという。³⁷⁾ このことは、上述の中国人殺害と共に、彼らの民族意識の性格を理解する上で注目に値するだろう。彼らはさらにそのあと、駅へ行って汽車の運行を妨害して市内での活動を終了した。一方スカンダル中団長らは、倉庫を解放して中の物資をブリタルの人民に分け与えた。このために彼はのちに日本側から共産主義者だと疑われたという。³⁸⁾

ところで、この突然の蜂起開始に日本側はどのように対応したのであろうか。ブリタル大団では、この夜専任指導官岩淵少尉は大団長宅を訪れていて不在、また木村少尉はスラバヤへ行っていて留守であった。³⁹⁾ 事件の報告は、残っていた指導官たちによって、まずマランへ知らされ、マランの州庁関係者の手で直ちに東部防衛隊⁴⁰⁾へ報告された。当時、東部防衛隊配下

33) Nugroho, *op. cit.*, pp. 30-31.

34) *Ibid.* pp. 30-31.

35) *Ibid.* p. 44. ならびに元義勇軍指導部将校山崎一中尉の筆者あて書簡 (1975年7月19日付)。

なお、山崎中尉は、のちの軍律会議において判土をつとめた。

36) 山崎一の書簡ならびに当時ブリタルに住んでいた一中国人女性 (匿名希望) とのインタビュー (1974年2月、マランにて)。

37) Asia Raya (インドネシア語日刊紙) 1945年6月3日付ならびに Nugroho, *op. cit.*, p. 45.

38) スカンダル中団長とのインタビュー (前述)。

39) 山崎一の書簡 (前述)。

40) 当時ジャワの日本軍は16軍の指揮下に、東部、中部、西部の三地区防衛隊を設置していた。東部防衛隊は、スラバヤに司令部を置き、第28混成旅団を基幹としていた。

の日本軍部隊はすべて中部ジャワのスマランでの合同演習に参加しており不在であった。14日朝ブリタル大団が蜂起したという報をうけたのち、マラン大隊（隊長片桐寿大佐）⁴¹⁾は直ちにクディリへもどるよう命じられた。彼らはクディリを根拠地としてそれ以後反乱軍の討伐に当たることになった。しかしこの時弾薬はいっさい与えられなかったという。⁴²⁾

一方ジャカルタでは、軍司令部は東部防衛隊長岩部少将からの報告で事件を知り、ただちに義勇軍指導部に連絡をとって、馬杉情報参謀と山崎一大尉（義勇軍指導部）を空路マディウンへ出発させ、そこからさらに車で現地へ向かわせた。その後遅れて15日に、義勇軍司令部から市木竜夫、井上常三両嘱託とモゴット小団長、軍政監部から宣伝部の清水齊がかけつけた。⁴³⁾

ところで、蜂起軍の動きに眼を転じてみると、このあと彼らは4隊に分かれ、ブリタルからそれぞれ東西南北の進路をとってケルット山めがけて進軍した。当初の計画では、蜂起軍を三分し、マラン、パレ、ジョクジャカルタを指して進み現地の大団と一緒に立ちあがるよう勧誘する予定であったが、準備不足のため、この長距離の進軍は中止された。代わりに、ケルット山中に集結して、そこで抗戦しつつ他の大団の蜂起を待とうと考えたのである。これ以後の蜂起軍各部隊の動きはほぼ次のようであった。⁴⁴⁾

<北方部隊>

北方部隊は、第3中団の第2小団長スナルジョの指揮下にあり、大部分は彼自身の小団の兵から成っていた。その数は30～40名であったと思われる。この部隊には最初スプリヤディも加わっていた。しかし北方部隊がブリタル市の北方のクレンチェン村まで来た時、スプリヤディはスナント分団長の指揮下にある東方部隊に会うためガンドゥサリへ行きたいと述べ、二人の親衛隊員を連れて本隊を離れたのである。そしてそれ以後今日に至るまで行方不明になっている。

クレンチェン村でスプリヤディと別れて後本隊は夜明け頃キアイ・ハジ・ガブドゥラー・シラッド (Kjahi Haji Ngabdullah Sirad) の経営する同村内の回教学校に入った。彼らはこの日一日ここに留まって休息した後、夕方6時頃ガルム (Garum) を目指して出発した。出発前にキアイ・ハジ・ガブドゥラー・シラッドは兵士達を祝福した。

部隊はその後カランレジョ (Karangrejo) からカラントフン (Karangtahun) を経てグレゴグ

41) この大隊は、東部防衛隊指揮下の独立歩兵第156大隊で、マラン、クディリ両州がその管轄地域であった。この指揮下にマラン市に3個中隊、クディリ市に1個中隊、ルマジャンに1個中隊が配属されていた。なお、ブリタル市内には、憲兵隊以外の日本軍は配置されていなかった。

42) 元片桐大隊下の駐マラン中隊長松田恒男大尉とのインタビュー（1975年7月、東京にて）。

43) 山崎一の書簡。

44) 蜂起の経過に関しては、スグロホと、スフッドの著作の間に食い違いが見られるが、本稿においては、特に断りのない限り、スグロホの説に従って記述し、スフッドの記述は必要に応じて参照するにとどめた。それは、スグロホの研究は、スフッドの記述をふまえた上でさらに他の多数の関係者に直接面会して得たデータに基づいてまとめられたものであり、より信憑性があると考えられるからである。

(Nglegok)へ着いたが、ここでもまた、回教指導者キアイ・ハジ・ムハマッド・ホリル(Kjahi Haji Muhumad Cholil)の手厚い保護と援助を受け一夜をここで過ごした。⁴⁵⁾そして翌15日の朝、指揮者のスナルジョ小団長は部下を集めて、自分たちは既にトゥルンガグンの義勇軍によって包れていることを伝えた。インドネシア人同胞には決して銃を向けてはならないという指示を受けていたので、彼らはこの義勇軍にも抵抗しないことを決め、部下たちに一人一人逃げるように命じた。その命令に従って部隊は解散し、義勇兵たちは制服を脱ぎ武器を捨て、いくつかの小グループに分かれて散っていった。しかし大部分の者はその日のうちに捕えられた。自分の村へ帰りついた者もいたが、彼らも後日、上官であるチプトハルソノ中団長によって捕えられた。こうして全く交戦せぬうちに北方部隊は、あっけない終局を迎えたのである。

<東方部隊>

東方部隊はスナント分団長の指揮下に第3中団の二つの小団を主たる戦力としていた。その他に大団本部所属の将校が5人（中団長2人、小団長3人）とスカルディ(Sukardi)に率いられた1分団（第4中団第3小団第3分団）が加わっており、全体で約60名を擁していた。小団長や中団長をさしおいて分団長たるスナントがこの部隊の指揮権を握ったということは、この反乱軍の性質を知る上で興味深いことである。即ち第1回目の秘密準備会談でスプリヤディが「我々は皆平等である」と言って各自階級章をはずしたその精神が、このようなところに生かされている。ここでは、日本軍によって作られ与えられた階級など全く意味を持っていなかった。ただ人望と指導力がありさえすればそれで充分“人民軍”の長として活躍し得たのであった。

ところで、この東方部隊の出発に際して一つのエピソードがある。兵舎の前で指揮者のスナント分団長は「インドネシアは独立するであろう。(Indonesia akan Merdeka!)」と書かれたポスターを引き降すように命じた。そして“akan(～であろう)”と書かれた部分を短剣で引き裂いて「インドネシアは独立する(Indonesia Merdeka)」と改めた後に再び掲げるように命じた。これは象徴的な出来事である。「インドネシアは独立するであろう」という未来形で書かれた初めのポスターは即ち日本製の“後日の独立”を意味している。それを「インドネシアは独立する」という現在形に直したことによって日本製の独立を拒否し、今ここで自分たち自らの手によって独立を勝ち取るのだという強い意気込みを表わしたのである。この事実からもこの蜂起が単なる抵抗ではなく、“インドネシアの独立”を展望していたということがうかがえるのである。

かくして東方部隊は出発し、ほどなくガルン(Garun)に着いてこの地の砂糖工場で休息し

45) 蜂起軍を援けた二人の回教指導者は、後日、日本軍憲兵隊から厳しい取り調べを受けた。ガブドゥラー・シラッドは逮捕され、後獄死した。ムハマッドのほうは捕えられて苛酷な尋問を受けたが、運良く釈放された。

た。彼らは指令通りにこの工場内の日本人を探したが、工場の建物はどれも無人だった。工場の事務所を破壊した後、彼らは再び出発し、ベンチェ（Bence）で、前方から車でやって来た日本人民間人に会いこれを射殺した。ベンチェを通過すると、夜が明けてきたので危険を感じて裏道へ入り、スンベルアグン（Sumberagung）を目指して進軍した。途中ケンダルレジョ（Kendalrejo）ゴム農園で事務所をかき回していった。

午後2時にスンベルアグンへ着いた時、日本軍が空襲をかけてきた。しかし彼らはともかく休息し、村長をはじめとする村民たちから食物を与えられた。

しかし間もなく、前方からブリタル大団第3中団のチプトハルソノ中団長を長とする義勇軍がやって来た。彼らは反乱軍を大団まで連れ戻すようにとの命令を受けてやって来たのであった。初めこの軍隊を見た時、イスマンギル（Ismangil）中団長は発砲するようにと主張したが他の将校たちがそれを許さなかったと言われている。同胞には銃を向けるなという最初の指令をあくまで忠実に守り通そうとしたのである。やって来たチプトハルソノ中団長は部下たちを集めて訓示を垂れ、彼らを降伏させてブリタルに連れ戻すことに成功した。

かくして、東方部隊の進軍も、一度も交戦せぬうちに終息してしまったのである。

<南方部隊>

大団本部要員によって構成されていた南方部隊は、さらに二つのグループに分かれ、終始行動を別にした。大きいほうのグループはダスリップ（Dasrip）小団長（大団旗係）とイマン・バクリ（Iman Bakri）分団長の指揮下にあり、彼らは大団を出てからガプラン（Gaprang）を通過し、さらにドゴン（Dogong）にてプランタス川を渡ったところで夜が明けた。そこでベテット（Betet）山に登り宿営をした。この朝、頭上には多数の飛行機が低空飛行を続けていた。彼らはこの山にいったん落ちつき、ここから麓のロドヨの郡長兼警察官と連絡をとった。郡長は彼らに食物を提供してくれた。日が暮れてから彼らはロドヨへ向かって下山し始めた。その途中、西の方からクディリ大団の義勇軍がやってくるのに出会った。そのクディリ軍の中から“竹山”という日本人指導官が出てきたので、反乱軍は当初の指令通り発砲した。しかし不運なことに、それはクディリの義勇兵に当たってしまった。クディリ軍は反撃してきたので、反乱軍は退散し、その夜はグロンドン（Glondon）橋付近に泊った。この時逃亡した兵が何人かおり、その中には何と指揮者のダスリップ小団長も入っていた。翌15日に、彼らはロドヨ経由でブリタル大団から、全員ただちに帰るようにとの電話命令を受けた。バクリ（Bakri）分団長は大団長自らの命令でなければ帰らないと答えた。後に再び電話があり、また同じ返事がくり返された。するとしばらくして本当に彼らの大団長スラフマツが、チプトハルソノ中団長を伴ってやってきたのである。大団長は、反乱軍全員に向かってすぐ大団へもどるようにと命令した後、ジャワ語でバクリ分団長に次のように言った。「父親一人を大団に残しておいて、お

前は何という子供だ。日本はまだ強いから反乱はうまくゆくまい。」拒否した者も何人かいたが、大部分は大団長の命令に従ってブリタルへ帰っていった。彼らは、大団長の背後に日本の力が存在していることを忘れていたのである。

一方、もう一つのグループはタルムジ(Tarmudji)に率いられて進軍し、グロンドン(Glondong) 橋を渡ってロドヨで一夜を過ごした。そして翌15日はバチェム(Bacem)を経てセランを目指し、途中クラタック(Klatak) 川で夜を明かした。16日にジャルワディ(Djarwadi) 分団長が訪ねてきて、「反乱は成功しない。他の大団は共鳴するどころか、むしろ君たちを包囲しにきている」と伝えた。かくして、砲火を交えることもなく、南方部隊も大団へ連れ戻されたのであった。

<西方部隊>

西方部隊は、計画の当初から中心的役割を果たしていたムラディ(大団副官)、スバルヨノ(第2中団第1小団)、S・ジョノ(第1中団第3小団)の三人の小団長によって率いられ、200人を擁する大部隊であった。この部隊は、前述したように、まず市内各所を襲撃したのち、北方に進路をとってガンチャル(Ngancar)の森に集結した。進軍の途中各地で、日本軍の連絡を妨げるため電線を切った。また農園を通過する際には日本人を探したがもう全部逃げた後だった。ガンチャンの森で野営したが、ちょうど雨季だったため、部隊はずぶぬれになり寒さに震えていた。

日本軍は、他の部隊に対して試みたのと同じように、最初、大団の上官(ハッサンナワウイ中団長)を使つての連れ戻しを計ったが失敗した。派遣されたハッサンナワウイ中団長は、反対に部下達によって抑留されてしまったのである。そこで、ジャカルタから15日にかけてきていた宣伝部の清水齊が、義勇軍たちの信頼の厚いバ・ベンドのもとをたずね、仲介を依頼した。しかしバ・ベンドは、「ムラディはまちがっていない。まちがっているのはあなた方日本人のほうだ」と言って清水の要求を聞き入れようとしなかったという。日本側はさらに防衛義勇軍特設遊撃隊やジャカルタの義勇軍指導部から何人かの義勇軍将校を工作に派遣した。その中にはタンゲラン道場でスプリヤディと同期だったスチプト(Soetjipto)中団長やダーン・モゴット(Daan Mogot)小団長もいた。⁴⁶⁾

かくして、あらゆる打診を重ねた後に、農園の責任者をしていたブルウォスダルモ(Poerwosoedarmo)の家で、ムラディと片桐大佐の間に会談が行なわれることになった。(スフッドによれば、ムラディと清水、依田准尉との間に会談が行なわれ、そのとりきめを後に片桐が承認したことになっている)。この会談には、他にS・ジョノ、バ・ベンド、遊撃隊の二人の小

46) 柳川宗成『陸軍諜報員柳川中尉』(サンケイ新聞社、1967) 178 pp. ならびに山崎一の書簡。

団長およびブリタル大団のかつての指導下士官であった橋爪が同席していた。

大団へ帰還する条件としてムラディが提出した条項は次のようであった。

1. 反乱参加者を武装解除しない。
2. 反乱軍に対して責任の追求はしない。

ヌグロホは、これ以外の条件は明らかではないと述べているが、スフッドによればさらに次の3カ条が追加されている。

3. すでにとられた行為の結果生じた損害は賠償する必要がある。
4. 日本人指揮官の義勇軍兵士に対する待遇を改善する。
5. 未解決になっている“旗”の件を満足のいくような方法で解決する(大団長の乗物には、日本軍の将校としての地位を示す大団旗を使用することが定められていたが、その実施は日本軍の妨害によって遅れていた)。

片桐大佐はすべての条件を受け入れ、約束を守る印として自分の剣をムラディに渡した。かくして合意が成立したので、西方部隊は2月28日、武器を手にしたままトラックでブリタルまで送還され、ブリタル反乱はここにそのすべての幕を閉じたのであった。蜂起開始後、2週間目のことであった。⁴⁷⁾

事件の解決に当たって特徴的だったことは、日本軍は一度も直接前面に出ずに、義勇軍、兵補、特別警察隊などのインドネシア兵を前面に出して威嚇したこと、また直接的な武力行使を避け、大団の上官など彼らに対して影響力をもっている人々による説得工作を主にしたことなどである。皮肉なことに、ブリタルの将兵が蜂起の際の同志として期待していたクディリやトゥルンガグンの義勇軍が反対に反乱鎮圧のためにかり出されたのであった。彼らは、連合軍が上陸したので直ちに行動を開始するようと言われ、だまされて出動させられたのである。⁴⁸⁾ 蜂起軍は、インドネシア人に対しては抵抗しないであろう、という弱点を日本側は見ぬいていたのであった。

ところで、この蜂起に参加したのは大団総勢500名のうち410名の将兵であった。⁴⁹⁾ 不参加の約100名のうち大部分はスヤトモ中団長指揮下の第4中団の兵士である。その他の不参加者の大部分は大団長や中団長などより上級の将校たちである。⁵⁰⁾ 原則として中団長以上は蜂起に勧誘されず、蜂起の主導権を握ったのは若手の小団長、分団長クラスであった。それは第一に、

47) しかし、この後も憲兵隊は拡声器をもって「インドネシア・ラヤ」の音楽を流しながら、まだ森の中に潜んでいると思われる残兵の捜査を続けた。

48) Idris, *op. cit.*, pp. 41-42. しかしながら、山崎一は、蜂起鎮圧に義勇軍を使用した事実はなかったと述べている。

49) Asia Raya, 1945年6月3日付。

50) 蜂起開始当初、スプリアディらが、親日的だと思っていた大団長や中団長の家におもむき、銃をつきつけて殺そうとした、ともいわれている。スカンダル中団長も、銃をつきつけられたが、部下が立ち上がった以上自分はいじっとしていられない、という判断から蜂起に参加したという(スカンダルとのインタビュー)。なお、全部で8人の中団長中、蜂起に参加したのは3名であった。

上官たちは一般に熱意が少ないと判断されたからであり、また第二に、彼らは兵舎の外に住んでいたのも小団長以下の者たちとの結びつきがうすかったからである。このことは、のちの45年革命の中で果たすいわゆる新世代の役割と重ねあわせてみると興味深い。⁵¹⁾

4. 軍律会議

日本軍の巧みな処理によって、ブリタル蜂起の火の手はジャワ各地に燃え広がることなくして鎮圧された。そして事態終息後、直ちにジャカルタから憲兵隊が派遣され事実の徹底調査が行なわれた。片桐大佐との会談によって、「反乱軍の責任追求はしない」という合意に達した西方部隊に対してもこれは例外ではなかった。厳しい拷問をまじえた調査の結果、3月8日に容疑者がジャカルタへ送られ、そのうち68名（軍発表）に対して5月1日から8回にわたる軍律会議が開かれた。⁵²⁾ 彼らには日本軍刑法が適用されることになり、義勇軍指導部長吉本大佐が判士長、同指導部員山崎大尉と法務官木田大尉が判士をつとめた。⁵³⁾

第16軍司令官（当時は長野佑一郎中将）は裁判に先立って、特別傍聴人としてインドネシア人知名人6名を任命し、法廷へ意見を上申させた。この委員会のメンバーは次のとおりである。

- スポモ教授 (Dr. Soepomo) — 司法部参与
- アビクスノ・チョクロスヨノ (Abikusno Tjokrosoejono) — ジャワ奉公会
- オット・イスカンダル・ディナタ (Oto Iskandar Dinata) — ジャワ奉公会、防衛後援会会長
- カスマン・シンゴディメジョ (Kasman Singodimedjo) 大団長 — ジャカルタ大団
- スディオ (Soediro) 大団長 — トゥルンガグン大団
- ムジャキル (Moedjakir) — 回教大学長⁵⁴⁾

これらはいずれも、年長の対日協力者たちであり、それぞれ政界、軍部、民間を代表する知名人たちであった。彼らは合議の末、軍律会議に報告書を提出した。それは兵士たちがまだ若くて、情熱的な民族意識に影響されやすいという状況を強調して、次の2点を提案した。

1. 決して死刑を宣告してはならない。
2. 重刑は課してはならない。⁵⁵⁾

51) 45年革命においては、戦前からの民族主義者で、比較的隠健な思想をもつ、いわゆる「旧世代 Angkatan Lama」の人々と、日本軍政時代に台頭してきた、急進的青年層を中心とする「新世代 Angkatan Baru」とが、その価値観、イデオロギー、戦術等において、絶えず対立を繰り返していた。

52) 1945年6月13日付の『ジャワ新聞（邦字紙）』に記載された軍発表による。

一方、ヌグロホによれば、3月8日に、78名がジャカルタへ送られたが、その後、このうち26名がブリタルへ帰され、結局52名が裁判にかけられたという。また裁判の日付に関しても、4月14日から3日間となっている。

53) 山崎一の書簡。

54) 同上。なお、この人選はスカルノに依頼されたという。

55) Soehoed, *op. cit.*, p. 181.

日本軍は、反乱軍を逮捕する際に、インドネシア人を刺激しないようになるべく彼ら自身の上官を利用したが、ここでもまた同じような狡猾な手順を踏んだのである。即ち、逮捕に際してと同様に、裁判においてもこのような諮問委員会を作って、インドネシア人自身によって裁かれたかの如き印象を与えようとしたのである。それは一つのフィクションに過ぎなかった。そして結果的には、この委員会の提案は全く無視され、死刑を含む厳しい判決が下されたのである。⁵⁶⁾

裁判は全く一方的な形で行なわれた。即ち弁護人も検事もなく、発言したのは裁判長だけで、彼が一人で起訴を申し立て、その後で判決を言い渡した。判決は55人に対して、4月16日に言い渡された。6人が死刑、3人が終身刑、6人が15年、6人が10年、17人が7年、7人が4年、3人が3年、7人が2年の刑を宣告された。禁固刑になった者のうち終戦までに4人が獄死したが、その他は45年9月に共和国政府によって釈放された。⁵⁷⁾

ところで、その中には首謀者であるスプリヤディ小団長は含まれていない。彼は途中で行方不明になったまま、日本軍の大がかりな捜査によってもついに発見されなかった。(彼の名は裁判の最中にも一度も口にされなかったという。)柳川によれば、スプリヤディはケルット山中で姿を消したのち、中部ジャワのサラティガへ逃げこみ、この地の義勇軍特設遊撃隊のイスカソンドル小団長らにかくまわれたが、その後西ジャワのパヤ炭鉱に潜伏すべく出発したまま消息を絶った。⁵⁸⁾ スグロホは、恐らく日本軍に捕えられ秘かに殺されたものであろうと推測している(前掲書, p. 55) また、スフッドは、スプリヤディがケルット山中で自殺したことをほのめかしている(前掲書, p. 156)。スプリヤディの行方は今日でもなお、ジャワの人々の大きな関心事の一つである。ジャワの神秘主義の中にスプリヤディは永遠に生き続けている。彼は行方不明のまま戦後(1945年10月)、インドネシア共和国の初代陸軍総司令官ならびに治安相に任命された。そして今日も、インドネシア民族の意識と信仰の中に、幻の将軍として生き続けている。

一方、軍律会議に送られずブリタルに残った者たちは(反乱参加者も不参加者も共に)4月14日にウィリス Wilis 山(マディウン市の南東)の北斜面にある荒地ガンビョック(Gambjok)へ隔離され、日本軍が敗北するまで、その厳しい自然条件の中で重労働を課せられた。独言宣言後ブリタルへ帰ることを許されたが、その時にはすでに義勇軍は最高指揮官によって解散さ

56) 厳しい判決が出たことに対して、第16軍の宮元参謀は、「少なくとも日本人を殺した者は極刑にしないと、僻地で一人勤務している軍属、邦人は居たたまれないとの軍政監部の意見だった」と述べている。宮元静雄『ジャワ終戦処理記』1973, p. 22. また、山崎一の書簡でも、同様の理由が述べられている。なお判決後、宮元参謀は、インドネシア人指導者の中で責任もって、被告たちを引きとり指導する者がいれば助命に努力すると、非公式に申し出たが、引き受ける者がいなかったという。

57) Nugroho, *op. cit.*, p. 56.

58) 柳川宗成『前掲書』p. 167. また、別班通訳中島正周氏も、この情報を肯定している(同氏とのインタビュー, 1972年3月千葉にて)。

せられていた。⁵⁹⁾

III インドネシア民族への衝撃——結論にかえて——

日本軍政時代を通じて、ジャワにおける最大規模の反日抵抗事件であったブリタル蜂起は、ブリタルの民衆あるいはさらに広くジャワの民衆や他の義勇軍の兵士たちにどのように受容されたのであろうか。

まずブリタル市内では、2月14日早朝蜂起開始を告げる迫撃砲の大きな発射音が夜空にはげしくとどろき就寝中のブリタル市民を目覚めさせた。翌朝市内のすべての学校には理由も告げずに無期限休校の札がはり出された。⁶⁰⁾ またスプリヤディを探し出すためと称して、民家にも日本兵が立ち入って家宅捜査を行なった。反乱参加者の家族は事件発生と共に、日本軍によって人質にされた。⁶¹⁾ ガンジュック (Ngandjuk) のスプリヤディの実家では、2月14日朝蜂起のニュースを知るや否や、悲しみのうちに家族全員が集まってスラマタン (Selamatan 近隣の者を集めて食事を共にし、聖霊に身の安全を祈るジャワ伝来の宗教儀式) を行ない、息子の身の安全を祈った。それが終わったところへ突然日本軍がやってきて父を連行していった。数カ月後によりやく釈放されもどってきたが、郡長の職はもちろん奪われ、その後は終戦に至るまでケルトソノで日本軍の厳しい監視下で軟禁生活を送らねばならなかった。⁶²⁾

蜂起のニュースは当初は秘密にされていたが、1945年4月17日付新聞で日本軍発表という形ではじめて報じられ、その後6月13日付新聞で裁判の結果と事件の概要が詳しく報道された。⁶³⁾ また5月27日付のインドネシア語官報第67号にも発表されている。⁶⁴⁾

一方、義勇軍各大団では、すでにこれより先、指揮官の口から、あるいは仲間同志の噂の中から何となくニュースが伝わっていた。特にブリタル近郊の諸大団では、事件直後から直接その余波をうけ激しく動揺していた。たとえば、マディウン大団では、ブリタル蜂起の直後に、ある小団長が靴の中に弾丸を入れていたのが見つかり憲兵隊に連行されたままついに帰って来なかった。またこれと同時に2人の小団長が免職になった。その大団がかつて南マディウンに駐屯していた頃上述の小団長は外泊の時などにこっそりブリタル大団と連絡をとっていたらしい。⁶⁵⁾ 同じくマディウン州のポノロゴ大団では、ブリタル事件後憲兵隊がやってきて、ブリタ

59) Soehoed, *op. cit.*, pp. 185-186. なお、ブリタル事件当時、マディウン大団の中団長であったスハルト (Soeharto 現大統領) は、事件後、ブリタル大団へ転属され、ウィリス山中で再訓練を任されたといわれる。

Roeder, O. G., *The Smiling General President Soeharto of Indonesia* (Jakarta, 1969) p. 97.

60) 当時ブリタル小学校の生徒だったスナルト・カルトディムルヨ (Soenarto Kartodimoeljo) とのインタビュー (1973年2月、ブリタルにて)。

61) スティ・ラハユ, ならびにプラニョト姉弟とのインタビュー (前述)。

62) スプリヤディの母とのインタビュー (前述)。

63) Asia Raya, 1945年4月17日付ならびに6月13日付。

64) Nugroho, *op. cit.*, p. 56.

65) 元マディウン大団小団長スコチョ (Soekotjo) とのインタビュー (1972年10月、ジャカルタにて)。

ルの出来事について述べ、この大団は決して参加させぬように厳しく命じていった。⁶⁶⁾ その他の諸大団では、インドネシア人よりもむしろ日本人指導官の間にはげしい動揺をもたらしたようで、事件直後に、大団によっては義勇軍の武器が取り上げられたりしている。⁶⁷⁾

また第16軍司令官は事件後まもなくジャワ全土の大団長をジャカルタに集めて会見し、事件の原因に関する彼らの意見をたずねたのち訓示を垂れている。⁶⁸⁾ さらに、西部ジャワでは各大団の小団長をバンドゥンの義勇軍司令部へ集めて彼らの不満を申告させると共に義勇軍司令部の渡辺少佐が訓示を行なっている。⁶⁹⁾ 日頃と異なるこのような緊張感がそれとなく義勇軍兵舎全体にも伝わり、彼らの間に少しずつ真相が伝わっていったようである。ある小団長は、日本側は遊撃隊を使って義勇軍に対する監視体制を強化したようだと語っている。⁷⁰⁾

ブリタルの蜂起は、直接間接に他の諸大団の将兵を発奮させ、これ以後の一連の反日事件を生み出してゆく刺激となった。例えば、チマヒ大団（プリアンガン第4大団）では、ブリタル

事件後、日本人指導下士官が義勇兵に殺害されるという事件が発生している。真相は、義勇兵の憎しみを買っていた同大団の指導官と人違いされて殺されたということらしい。この事件に関連して小団長、分団長、義勇兵ら計5名が憲兵隊に連行され、そのままついに戻ってこなかった。⁷¹⁾

また、バンドゥン大団（プリアンガン第1大団）では、ルカナ（Rukana）小団長が自分の小団を武装させて日本人に対して蜂起しようとしたが中団長に説得されて未遂に終わるという事件があった。これはルカナ小団長が休暇で外出した時に、すれ違った日本兵が、彼の敬礼の仕方が悪いといって公衆の面前でなぐり肩の階級章をはぎとったのが直接の原因であった。当時、義勇軍将校は、本来なら下位である日本軍の一兵卒に対しても敬礼を義務づけられていた。そしてこの事件が常日頃から義勇軍将校のプライドをいたく傷つけていたのである。この日公衆の面前で自分より下位の日本兵から屈辱を受けた——イスラム教徒にとって、なぐられるということは最大の侮辱であった——ルカナ小団長はついに怒りをおさえられなくなってしまったのだった。この事件に対して日本軍は、特にいかなる処置もとらなかったようである。⁷²⁾

一方チラチャップ（パニユマス第1大団）では、1分団が武器をもって集団脱走するという事件が起こった。この大団の義勇兵は、日頃から隣接のクロヤ大団（パニユマス第3大団）の

66) 元ボノロゴ大団小団長ストジョ（Sutodjo）とのインタビュー（1974年9月、ジャカルタにて）。

67) 例えばケドゥー第1大団（ゴンボン）、チラチャップ大団、その他の大団である。

68) 宮元静雄『前掲書』p. 20.

69) 元ガルット大団小団長カタムシ・スティスナ・スンジャヤ（Katamsi Sutisna Sendjaja）とのインタビュー（1972年9月、バンドゥンにて）。および元ジャカルタ大団小団長スハイミ（Suhaimi）とのインタビュー（1972年10月、ジャカルタにて）。

70) 元マラン大団小団長アブマル・イマン・ホールマイン（Abumar Iman Khourmain）とのインタビュー（1972年9月、バンドゥンにて）。

71) 元チマヒ大団中団長オモン・アブドゥラフマン（Omon Abdulachman）とのインタビュー。

72) 元バンドゥン大団中団長スカンダ・ブラタマンガラ（Sukanda Bratamangalla）とのインタビュー。

スディルマン大団長（のちのインドネシア共和国初代軍司令官）から直接間接に精神的影響を受けて民族主義的に目覚めていたようである。ブリタル事件のあと、チラチャップ大団では一時理由もなく兵器を日本側に取り上げられた。これに加えて、あちこちからブリタル事件に関する噂を少しずつ耳にしていたチラチャップの将兵たちの間に何となく動揺が広まり始めた。そして1945年5月か6月頃のある日、第1中団のクセリ分団長に率いられた一群が、武器をもって集団脱走し、クロヤ方面へ逃走した。クロヤ大団へ行き、ヤシル分団長らと合流する予定だったらしいが、準備不足で不備が多かったためクロヤに着く前にプルオケルトの日本軍により鎮圧されてしまった。約50名が逮捕されジャカルタへ送られて軍律会議にかけられたが、判決が出る前に終戦になったため犠牲者は出なかった。⁷³⁾

また、プルワカルタ（ジャカルタ州第2大団）のレンガスデンドロック駐屯中団は8月16日のスカルノ＝ハッタ誘拐事件に関与したことで知られている。この中団の将兵の間には、既に以前からウマル・バハサン（Oemar Bahasan）小団長を中心にサブ・マス（Sapu Mas—金^{はうき}の簪）という反日秘密組織が作られ、このグループはしばしばジャカルタの急進的青年たちと連絡をとっていた。8月15日、日本軍が降伏するや否や、スカルノ、ハッタに独立を宣言するように迫って拒否されたジャカルタの青年指導者たちは、8月16日この兩人を拉致し、レンガスデンドロックの義勇軍兵舎に幽閉した。この時、この地の義勇軍は、日本人指導官を含む周辺のすべての日本人や親日的なパモン・プラジャ（地方行政官）を逮捕し、インドネシア民族旗を掲揚し新しい郡長（Wedana）を選出してその地方をインドネシア共和国最初の解放区として宣言した。一方、スカルノ、ハッタはこの地での青年たちとの話し合いの結果、独立宣言を行なうことに同意し、16日夜ジャカルタへ戻っていった。そして翌17日朝、インドネシアの独立宣言がプガンサン・チムールのスカルノ邸で発表されたのは周知のことである。⁷⁴⁾ このように、独立宣言を実現させる大きな推進力の一つとなったレンガスデンドロックの義勇軍の役割は忘れてはならないものである。そしてまた、ブリタル蜂起がこのレンガスデンドロックの将兵に与えた影響も少なからぬものであった。サブ・マスのリーダー、ウマル・バハサン小団長は次のように述べている。⁷⁵⁾

「……ブリタル事件に関するニュースは各大団に徐々に波うって伝わり、義勇兵の仲間の士気を高めた。我々デンドロックの者にとって、ブリタル事件は、我々人民が勝利するためには抵抗の方法が改善されねばならないという教訓になり忠告になった。」

このように、ブリタル蜂起が与えた影響は大きかった。蜂起自体は失敗に終わったが、この事

73) 元チラチャップ大団小団長スダルオ（Soedarwo）とのインタビュー（1974年9月、ジャカルタにて）。

74) これに関しては以下の拙稿を参照されたい。

「日本軍政期のインドネシア反日運動の一考察：レンガスデンドロック事件におけるサブ・マスの役割」『アジア経済』17巻4号（アジア経済研究所、1976）5

75) Oemar Bahasan, *op. cit.*, p. 26.

件は、単に軍政時代の最も大規模な反日蜂起であったというだけでなく、数カ月後に始まったインドネシア独立闘争（45年革命）の、いわば序曲としての意味をもっていたと考えられるのである。それは、日本と戦うことによってしか真の独立を達成する道がないことを、はじめて行動によって示したものであった。この思想と行動は、45年革命を担った青年指導者や、国軍指導者の中に、これ以後も受けつがれていった。言いかえれば、この蜂起は、防衛義勇軍がインドネシア国軍の母体になったという単なる歴史的関係を越えて、国軍に革命軍としての自負と伝統を与える一つの原点になったのではないだろうか。この事件がインドネシア民族主義にとっていかに大きな意味をもっていたかは、独立後に蜂起指導者スプリヤディが行方不明のまま初代の国軍司令官に任命されたという事実の中に象徴されていた。

＜補 記＞

本稿中の地名その他のインドネシア語表記は、インドネシア共和国における現行の表記法に従った。なお、人名、書名、新聞・雑誌名は原文の表記のまま引用した。